

第 15 回青森県気象災害連絡会

日時：平成 25 年 7 月 11 日（木）13:30～15:50

場所：弘前大学コラボ弘大 8F 八甲田ホール（弘前市文京町 3）

13:30～13:35 総会：今年度の役員を選出

<特集：2012-2013 年冬の豪雪災害>

13:40～14:20 「今冬の雪と低温に関する話題」

・・・泉 泰明（青森地方気象台防災業務課 防災気象官）

<調査研究報告>

14:25～14:50 「この冬の豪雪による弘前市の被害状況について」

・・・工藤 雅人（弘前市・経営戦略部・防災安全課・課長補佐）

14:50～15:15 「りんご低樹高栽培と雪害について」

・・・工藤 智（青森県産業技術センター・りんご研究所・栽培部長）

15:15～15:30 総合討論

（敬称略）

要旨

<特集: 2012-2013 年冬の豪雪災害>

今冬の大雪と低温について

青森地方気象台防災業務課 防災気象官 泉 泰明

今冬の特徴として、「低気圧がしばしば青森県付近を通過しその後発達」、「冬型の気圧配置の強まり」、「強い寒気の流入による低温」、「積雪は多いが降雪は平年並み」、「積雪の記録更新(弘前・酸ヶ湯)」が挙げられる。

これらの現象を引き起こした要因は、昨冬と同様に偏西風が蛇行し日本付近では通常より南下したことが大きく影響している。偏西風が南下したことで北極域の寒気が広く日本に入りやすい状態となり、また、偏西風の流れにのって低気圧が接近・通過し、通過後は東シベリア付近のブロッキング高気圧に行く手を阻まれ日本付近で発達することが多かったことが要因と言える。

なお、今冬は青森市より弘前市の方が積雪が多くなった。これは冬型の気圧配置が強まったことにより、等圧線の走向が斜めではなく南北に縦になることが多く、北よりの風が卓越したことが要因と考えられる。

<調査研究報告>

この冬の豪雪による弘前市の被害状況について

弘前市 経営戦略部防災安全課 課長補佐 工藤 雅人

平成 23 年度に続き、2 年度連続で豪雪に見舞われた弘前市では、平成 25 年 1 月 17 日に「弘前市豪雪対策本部」を設置し、さらに、平成 25 年 2 月 24 日には、「弘前市豪雪災害対策本部」へ移行となる。

被害状況については、人的被害の発生件数が 35 件(死者 4、けが 31)、家屋等の被害(本部事務局把握分)は、倒壊やガラス破損など合わせて 107 件となっている(どちらも平成 25 年 3 月 27 日現在)。

弘前市各部においては、屋根の雪下ろし対策用品の貸し出しや、空き家の屋根雪への対応、また、除雪困難者に対する市職員などによる除雪支援などを実施した。

降雪については、3 月に入り落ち着きを見せ、平成 25 年 3 月 28 日午前 8 時 30 分時点の和田町の観測地点における積雪深は 53cm となり、地域防災計画に規定する「緊急体制」を解除しても差し支えない状況となったため、「弘前市豪雪災害対策本部」は平成 25 年 3 月 28 日をもって廃止することとなった。

りんご低樹高栽培と雪害について

青森県産業技術センターりんご研究所 栽培部長 工藤 智

青森県におけるわい化栽培の多くは、最上位結実高が 3.5～4.5m と高く、作業効率が悪いいため、低樹高化による省力化と安全性の向上が求められている。そこで、100～125 本/10a の密植栽培で、収量 4t/10a、結実高 2.5m 以下、栽培管理の 80%を脚立なしで実施できる密植低樹高栽培の確立に取り組んでいる。樹形は下部側枝 4 本を斜立させた下枝斜立主幹形とした。6 年生までの結果では累積収量が多く、作業性の向上が図られた。

下枝斜立主幹形による低樹高は、当初最深積雪を 120cm と想定、斜立枝の先端が雪面上に出れば斜立枝本体は雪害から回避できると考えたが、2 年連続の豪雪（りんご研の最深積雪は平成 24 年が 166cm、平成 25 年が 180cm と 2 年連続で観測史上第 1 位を記録）により斜立枝の被害が大きかった。

本県のような多雪地帯では、何か画期的な雪害防止法や雪害に強い特殊な樹形が確立されないかぎり低樹高栽培は困難と思われる。